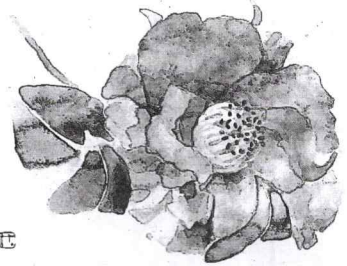


朝日 歌壇 俳壇



北村さゆり

大串 章 選

- 雲もまた空の旅人鳥帰る (印西市) 鈴木とみ子
- 人住まぬ生家を目指し燕来る (相模原市) はやし 央
- 戦争が歴史を作る春かなし (横浜市) 高野 茂
- 黄水仙文読む暮し続けたし (高知市) 加田 紗智
- 旅終えてなお旅心春惜しむ (高槻市) 山岡 猛
- 草笛を吹きて米寿の背を正す (館山市) 榎引 明江
- 青春は昭和の演歌春惜しむ (宇部市) 伊藤 文策
- さよならが最後の電話花に逝く (前橋市) 萩原 葉月
- 鳥帰る子は外つ国へ旅立てり (加古川市) 森本 史子
- 限界の集落抱きて山笑ふ (埼玉県鳩山町) 西川 紀生

【評】第1句。青空を白雲がゆっくり流れてゆく。「空の旅人」が言い得て妙。第2句。空き家になった生家に今年も燕が飛んできた。去年飛んできた燕だろうか。第3句。人間はどうして戦争を止めないのか。「春かなし」が胸にひびき、切ない。

高山れおな 選

- ☆東京へ攫はれて行く卒業生 (神戸市) 上岡あき子
- ☆冥い春つげ義春を連れて行く (筑紫野市) 二宮 正博
- 卒業や夕日が沈む明日へと (盛岡市) 菊地 十音
- 老桜ますしひこばえを咲かせおろ (横浜市) 岡部 豊
- ☆山歌ふ如き信濃の花見かな (川崎市) 岡田紀久生
- 佐保姫の息やはらかき山野かな (日立市) 加藤 宙
- 久しぶりにママとつなぐ卒業生 (成田市) かとうゆみ
- 遠山を眺めて暮れる虚子忌かな (神戸市) 益田 信行
- 春めくや黄色を選ぶ旅靴 (高松市) 葛原 由起
- ムスカリや風と朝日のアメジスト (船橋市) 齊木 直哉

【評】上岡さん。「攫はれて行く」に滲む喪失感に加えての無力感。二宮さん。連れて行くのは死。〈つげ氏逝き超現実の権見ゆ 小林美奈子〉とも。氏の名作に「紅い花」あり。菊地さん。「明日へと」に虚を突かれた。まさにそうなのだが。

小林貴子 選

- 湯水に神話の大蛇穴を出つ (宝塚市) 安井 修
- 鍵盤の勝手に動く龍一忌 (羽曳野市) 玉田 一成
- ☆冥い春つげ義春を連れて行く (筑紫野市) 二宮 正博
- 初物は猪に食はれて春節 (大阪府島本町) 池田 壽夫
- 赤彦忌歌とは憧れの形 (奈良市) 浦城 亮祐
- 嘯や猛禽一羽鉄柱に (桐生市) 今泉 健一
- 春風や何が不易か流行か (尼崎市) 田中 節夫
- しかるべき人が開花を宣言す (相馬市) 根岸 浩一
- もういいと一気に散るや老桜 (大田市) 岡島要一郎
- 山笑ふ日矢のくすくすする一処 (岡山市) 内田 正一

【評】一句目、蛇にはまさに、水を司る神性がある。二句目、無人で鍵盤が押し下げられる自動ピアノ、そこに坂本龍一の幻を見る。三句目、子ども時分の私に、「ねじ式」は怖かった、深悼。四句目、猪も瑞々しい節の美味しさを知っている。

長谷川 權 選

- 汚染水でふ屈辱の春の水 (長野市) 縣 展子
- ☆山歌ふ如き信濃の花見かな (川崎市) 岡田紀久生
- ☆東京へ攫はれて行く卒業生 (神戸市) 上岡あき子
- 世界地図眺める春の寒きこと (鳥取県大山町) 表 いさお
- 春風に転びて老いを疑はず (茨城県河内町) 吉村 巖
- 蝌蚪の水乾きてなにもなかりけり (東京都世田谷区) 野上 卓
- 戦雲に化すこともあり春の雲 (筑紫野市) 二宮 正博
- 花吹雪かつては樹下を川流れ (東京都中野区) 東 賢三郎
- しゃぼん玉ひとつの中に母の顔 (いわき市) 吉田 恵
- うぐいすのまた猫八に及ぼさる (栃木県壬生町) あらむひとし

【評】一席。「屈辱」が重い。全身全霊をかけた一語。二席。うすい紅色のオオヤマザクラ。春たけなわの信濃の讀歌。三席。ここまで育てた親の気持ち。子は忘れてはいけない。十句目。先々代は声帯模写の名手。艶のある麗らかな声だった。

短歌時評 一九七〇年代の短歌史

山崎 聡子

大阪万博の開催、三島由紀夫の割腹、あさま山荘事件、沖繩返還、ロッキード事件……一九七〇年代という激動の時代は何が書かれ、語られていたのか。膨大な資料から紐解いた吉川宏志の『一九七〇年代短歌史』が出版された。

「政治の季節」から「経済の時代へ」。冒頭では、そんな時代に歌人たちが何に苦悩し、どんな方法論で歌を詠もうとしたのか、福島泰樹、佐佐木幸綱、岡井隆らキーパーソンの動向とともに記される。

大阪万博の開催、三島由紀夫の割腹、あさま山荘事件、沖繩返還、ロッキード事件……一九七〇年代という激動の時代は何が書かれ、語られていたのか。膨大な資料から紐解いた吉川宏志の『一九七〇年代短歌史』が出版された。

「政治の季節」から「経済の時代へ」。冒頭では、そんな時代に歌人たちが何に苦悩し、どんな方法論で歌を詠もうとしたのか、福島泰樹、佐佐木幸綱、岡井隆らキーパーソンの動向とともに記される。

で歴史として語られなかったことを掘り取るという手付きにある。例えば、沖繩返還の年の全国紙の新聞歌壇には当事者の歌はほとんど掲載されていない。購読する人が少なかつたという事情があるにせよ、中央に到達しないものは「ない」とされ、また構造に筆者は立ち止まる。そのほか、女性歌人が切り開いた表現領域や、地方を拠点する媒体への手厚い言及は、歴史を多面体として捉えようとする執拗な意志に貫かれている。

歴史は流動するが、誰かが記すことで次の人が語り始めることができる。本書を皮切りに、今について語りたい。(歌人

井上康明著「飯田蛇笏の百句」 明治45年の「ふるさとの雪に我ある大炉かな」から昭和37年の辞世の句「誰彼もあらず一天自尊の秋」までを収録。(ふらんす堂・1650円)

抜井諒一句集「残影」 第3句集。2021年頃から25年までの331句を収録した。「白靴の知らざる森の暗さかな」「玉虫を逃がして授業再開す」(角川書店・2420円)

☆は共選作。入選作はデジタル版などにも掲載・収録し、記事やSNSで引用することがあります。投稿は未発表の自作のみ、二重投稿不可。選者が添削する場合があります。郵便での投稿は無地のはがき1枚に1作品、横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104-8661 晴海郵便局私書箱300。短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。ネットからも投稿できます(週に2作品まで)。QRコードから。

風信

